

パリ通信 第124号

はじめに

パリ通信を送ってくださる古賀順子さんがパリでコロナに感染された貴重な経験を投稿してくださいました。今は回復し元気になられています。（小原靖夫）

コロナウイルスに感染して

3月最後の週末、全身が怠く、くしゃみと鼻水が止まらなくなった。横になっても咳が続け、頭が重く、ふうせんのように膨れているようだった。耳も詰まりよく聞こえない。花粉症アレルギーかと思ったが、まさかのコロナ感染で茫然とした。月曜日近くの薬局で抗原検査を受け、即座に「陽性」結果が出た。

熱と呼吸困難がないので、7日間の自宅療養となった。オミクロン株感染だ。テレビのニュース、新聞、雑誌でオミクロンの感染力はデルタ株の3-4倍あるが重症化しにくいと言われている。軽症だと言われても、実際に自分が罹ってみると話は違う。三日三晩は咳、鼻詰まり、耳詰まりで眠ることができない。頭がボーとして思考力は全くない。病気をすると一人暮らしは不便で心細くなるが仕方がない。人に移す心配はないが、起き上がって水や薬を取りに行くのも一苦勞である。軽症でこれだから、重症の人はどんなにか苦しいだろうとしみじみと感じた。

5日目頃からようやく咳が止まる時間が長くなり楽になった。一日の間に何度か波があり、ウイルスはもう消えたかなと思うときとまた増えていると思うときの繰り返しだった。7日目随分と良くなり、薬局に再検査に行ったが依然「陽性」だった。食糧の買い出しもままならず、仕方なくネット注文・配達で急を凌がざるを得ない。11日目の再々検査でようやく「陰性」となり安堵した。

フランスでは3回のワクチン接種者は薬局やラボトリーで何度でも無料で抗原検査を受けることができる。そのワクチン接種のおかげで今回の感染がこの程度で済んだのだろうと感謝している。ただし、2回感染した知り合いの医者からオミクロン株は抗体が長く残らないので2・3ヶ月後にまた感染する危険性があると言われ落胆した。

コロナに慣れきって油断していたのかも知れないが、マスク、手洗い、三密を避ける生活習慣に変わりはなかった。いつ、どこで誰から感染したのか考えてみたがはっきりしない。間違いなのは周りがマスクをしなくなったことだ。3月14日からマスク着用義務がなくなり、ほとんどの人がマスクを外した。いくら私がマスクを厳守していても、全員がマスク着用していなければコロナウイルスに感染するという事だ。

4月9日のフランス一日新規感染者数は14万人を超えている。ウイルスは依然として流行している。24日大統領決戦投票が終わり、大統領が決まり、ひと段落したら再びマスク着用義務が戻ると言われており、早くそうなって欲しいと願っている。

オミクロン感染の自宅隔離からようやく解放され、久しぶりに外出できたのは4月10日。フランス大統領選第一回投票日である。マクロン現職を筆頭に、ルペン、メランション、ペクレス、イダルゴ、ゼムールら12名の候補者から2名が決戦に残る。20時からの開票速報で投票率75%、決戦投票に残ったのはマクロン現職(28,2%)とマリー・ルペン(23,4%)。5年前と同じ二人である。

2月24日に始まったロシアのウクライナ軍事侵攻で、フランス大統領選は異例の展開となった。通常の選挙活動ができなかったことはマクロン現職に優位に働いたようである。これで決戦投票はマクロン現職の勝利にほぼ間違いないと思われる。フランス納税義務者としてフランスに住んでいる私たち外国人には大統領選挙の投票権はない。フランス国籍者のみに限られる。これから5年間の大切な政治であり、私たち外国人にはマクロン継続で一安心できるだろう。

今回の投票日は晴天の「棕櫚の日曜日」でもあった。教会の前や街角で青々としたツゲの枝葉を買い求める人が目に付いた。イエス・キリストの聖週間を告げる日曜日で「復活祭」がすぐだ。二週間振りに歩いたパリは並木の新緑が美しく、桜が満開で穏やかな春を感じる。コロナウイルス感染から無事に快気できたことを神に感謝するとともに、悲慘な戦争に苦しめられているウクライナの人々に平和で暖かい春が一日も早く来ることを願って止まない。大変深刻な事態が続いているが希望を捨てずに前進できればと思う。

(古賀順子記)

下の写真は「パリの春」をイメージして小原が集めたものです

